

つた。治療は筋腫核出術4例を除きすべて子宮を摘除した。子宮の大きさ、肉眼的異常度、年齢、組織所見 (grade, mitotic counts, vascular invasion) などが予後判定因子と考えられ、これらを総合的に判断した結果、放射線療法、化学療法の後療法が追加されたもの6例が

あつた。現在までの死亡例は3例である。以上から本症の治癒率を高めるには早期診断しなく筋腫の臨床においては常々平滑筋肉腫の存在を念頭におき、小さな asymptomatic myoma と雖も頻繁に follow する習慣が必要であろう。

第4群 卵巣腫瘍 (27~32)

27. Arrhenoblastoma の内分泌能の *in vivo*, *in vitro* 分析と *functioning cell* の同定およびその培養細胞株の樹立

(川崎医大)

小川 重男, 佐藤 恒雄, 三上 知治
佐々木元章, 杉山 守

27歳の患者に発生した卵巣 arrhenoblastoma について、①術前、術中、術後のホルモン分析、②光顕による形態、各種ステロイド脱水素酵素の組織化学的検索、③³Hprognenolone, ¹⁴C-progesterone を基質として腫瘍組織の incubation を行い、④その細胞株の培養を試みた。臨床症状は、1年6カ月の無月経、多毛、音声低下、陰核肥大、萎縮性子宮内膜で、術前の血中 testosterone は 222ng, 198ng/dl で尿中 17-KS 分画では androsterone 7.14mg/24hrs, dexamethasone 抑制, hCG 刺激で, testosterone は 315ng/dl と上昇した。萎縮性子宮内膜にもかかわらず術前血中 estrogen は正常値。術中の卵巣動、静脈、末梢血中、腫瘍嚢胞液中の testosterone はそれぞれ 172, 224, 210, 5025ng/dl で嚢胞液中には 237pg/ml の estrone がみとめられた。腫瘍組織は Leydig 様細胞と胎生時辜丸胚索様配列をしめす長方形核を有する細胞とよりなり、各種ステロイド脱水素酵素は、前者にのみ陽性で, *functioning cell* と考えられた。Incubation では、¹⁴C, ³H いずれの経路からも testosterone が生合成され, estrogen も生合成された。培養では, cell line が樹立されたが、培養液中には、対照に比し, testosterone, estrone が高値で、各種ステロイド脱水素酵素も陽性であつた。さらに腫瘍剔出後400日の培養細胞について、¹⁴C-pregnenolone を基質として 72hrs. incubation を行つたが、各種 metabolites と共に testosterone, estrone の生合成が確認され、新しく樹立された細胞株は、本腫瘍の *functioning cell* であることが確認された。

質問

(千葉大) 関谷 宗英

細胞株のA腫である移植による組織レベルでの同定は?

質問

(慈恵医大) 大川 清

1. 継代確立株化細胞が, Leydig cell である根拠? 例えば再構築の結果は?

答弁

(川崎医大) 小川 重男

氷結標本で Steroid dehydrogenase が組織化学的に腫瘍中の Leydig 様細胞にのみ陽性であり、樹立された cell line も同様の所見であつたことから、株化細胞は腫瘍中の Leydig 様細胞由来と考えた。

組織再構築の実験は引続き行う予定である。

質問

(慈恵医大) 大川 清

Leydig cell でなくとも Ovarian stroma は Androgen 系 Hormone を出す可能性があるのでは、いかなる根拠で Leydig cell であるのかをおききしたいと思つた。

28. 株細胞にみるヒト卵巣 clear cell carcinoma の諸性格

(北里大)

西田 正人, 蔵本 博行, 上坊 敏子
田口 明, 長内 国臣

(静岡日本赤十字病院) 林 博厚

卵巣 clear cell carcinoma はその組織発生、形態学的特徴が議論的となつていゝが、今回、卵巣癌患者腹水の経代培養に成功し、移植腫瘍の形態から原疾患が clear cell carcinoma であつたことを診断した。又その株細胞 (以下 HAC-2) の検索により、本腫瘍の性格を解明した。52歳の手術不能末期卵巣癌患者から腹水を採取、遠沈の後、細胞成分を培養に供した。細胞は sheet 状に配列増殖し容易に pile up, ミラーボール様を呈し、同部に強く PAS, Alcian blue 陽性所見が得られた。ヌードマウスへの移植腫瘍では、粘液染色陰性の明かるく抜けた細胞質と micro cyst を特徴とする clear